

新潟大学考古学研究室2003年粟島調査報告

大野 安希 奥山 優一 坂爪 彩子
田丸 司 橋本 博文 森合 桂子

はじめに

昨年度、学部と大学院のゼミの一環で、「島嶼の考古学」をテーマに佐渡島をフィールドとして研究室として取り組んできた。その成果は、本誌前号の中で報告させていただいた。その概要は、佐渡島内の縄文貝塚出土人骨と共に受け入れた医学部第一解剖学教室所蔵のいわゆる小片コレクション中の考古資料と、当人文学部考古学研究室への寄贈佐渡島出土考古資料、さらに新に実査した佐渡島内遺跡での採集考古資料を資料紹介し、併せて一部石器素材の黒曜石産地分析を外部に依頼してそのデータを報告するといったものである。その結果、佐渡島内の縄文中～晩期の土器の外来系土器と在地の土器の少なからず貴重な資料を提供できた。また、縄文時代石器素材のうち、特に黒曜石の産地同定から、縄文時代における佐渡島内外の交易の様相を垣間見た。その他、弥生末～古墳時代前期の玉作関係資料や古代の製塩関係資料を僅かではあるが追加することができた。

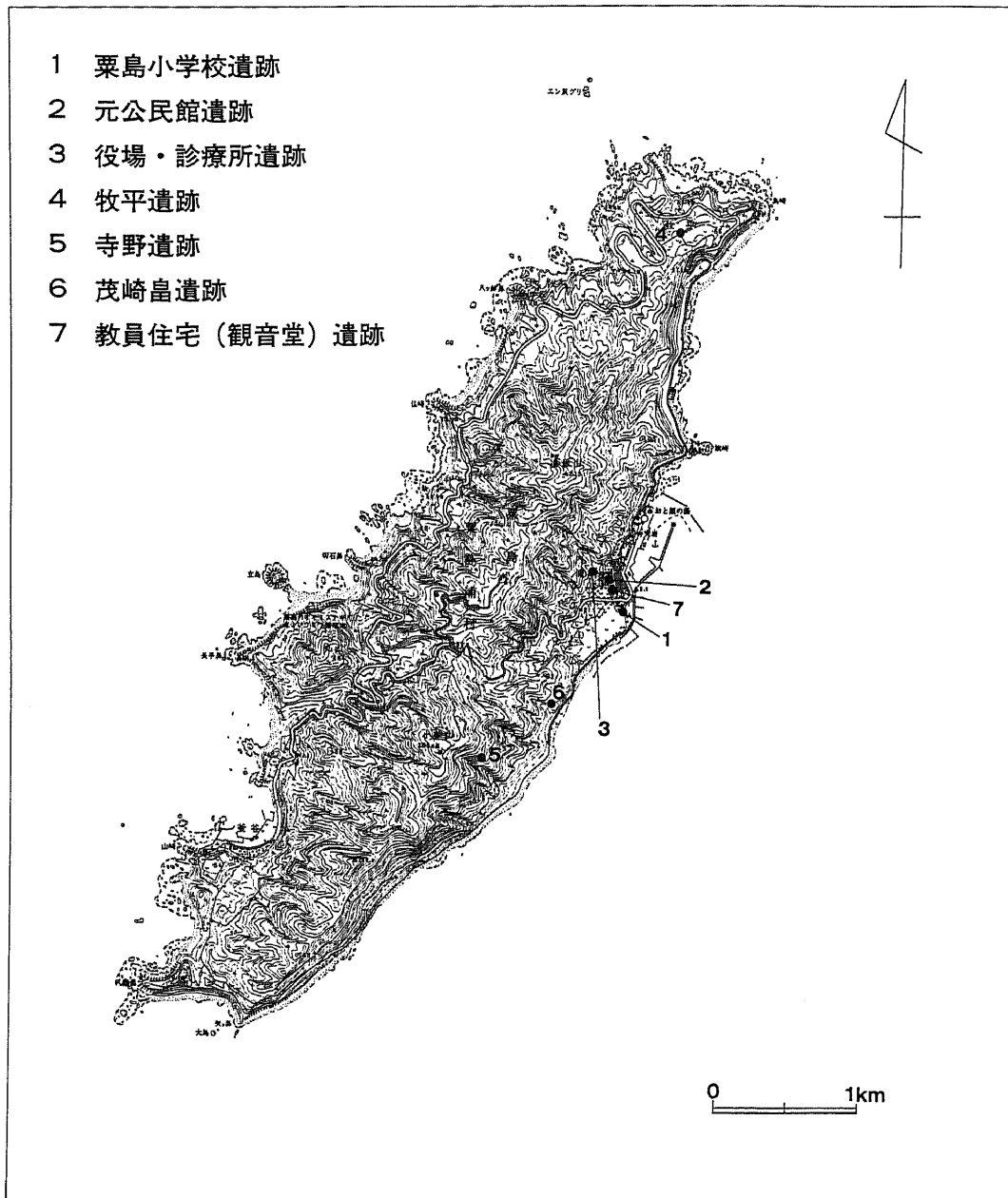
今年度は、佐渡島との関係から、新潟近海の二番目に大きい島、粟島を対象に、地元粟島浦村教育委員会の協力のもと踏査を実施し、さらに既出資料の再調査を行った。粟島と佐渡島、本州島との交流関係を考古資料から探してみたい。

(橋本 博文)

調査経過

- 7月5日 粟島浦村文化財館所蔵の考古資料の確認、粟島浦村公民館で資料の洗浄、図化、拓本とり等の資料化作業
- 6日 午前一粟島北部の角浦遺跡、牧平遺跡の踏査、粟島東部内浦地区の粟島小学校遺跡、観音寺遺跡、教員住宅遺跡、元公民館遺跡、役場・診療所遺跡の踏査、粟島小学校遺跡にて遺物2点（土製品）採集
午後一粟島浦村公民館で前日に引き続き資料化作業
- 7日 午前一粟島南東部の茂崎島遺跡踏査、粟島西部釜谷地区も踏査予定であったが雨天のため中止、粟島浦村公民館での資料化作業
午後一粟島浦村公民館で写真撮影などの資料化作業

(奥山 優一)



粟島の自然

1. 地 形

粟島は、新潟県村上市の北西海上約34kmにある、周囲18.5km、面積9.85km²の小島である。長さ7km、幅2km、丘陵性で起伏が少なく3－4層の段丘地形をなし、北から高畑、大坂、小柴(265.3m 最高地点)、金鉢、ドウヤシキなど200～250m級の高さの峰が続く。北端は広い台地をなし、かつて放牧も行われて牧平と呼ばれるが、現在は一部が畑地に利用されている。

中央部には、比較的大きな2つの谷が横断するように両側の海岸から延び、島を南部と北部に分けている。谷は解析も進んで深く小谷も多いが、新潟地震による減水、渇水で水量が乏しく、常時水の流れる川は角浦、内浦、釜谷、および外浦のタカンドなどにある数本にすぎない。

また島の周囲は急坂や断崖に囲まれ、ことに外浦の沈降海岸は峻険複雑で入江や小島が多く景勝に富む。角浦、内浦、丸山浦などのわずかな砂浜のほかはいずれも岩盤、転石、玉石などの浜であるが、新潟地震によって、島のほぼ全周にわたり、海岸が1m前後隆起し、岩礁が幅広く陸化した。

暖流の対馬海流は外洋を島近く北進し、その分流が前浜を回るが、流路や流勢は年によって変動が大きい。対岸の越後の洪水時には濁流が流れ寄って多くの漂流物を磯辺に運び、草木の種子や根、虫類の卵や生体の運び込まれることも少なくない。

2. 地 質

地盤は第三紀中新世の黒色頁岩と、それに貫入した粗粒玄武岩とが交互に配列しており、粗粒玄武岩は海蝕に抗して岬や断崖をつくり、頁岩部は風化が進んで溪谷や入江などとなる。内浦にはわずかに洪積台地があり、近くのハゲノハマの断崖は花崗岩の露頭である。海岸の断崖のほかはよく表土に覆われ、山野で岩盤の露出しているところはほとんどない。

3. 気 候

一応、日本海気候区に入るが、やや海洋的であり、暖流の影響により比較的温暖で、はるか北方に位置しながら新潟よりもいくらか高温である。海流と季節風の関係で初夏に濃霧の日も続き、冬季には激しい北西の風をまともに受けるが、遮る高峰も濃密な樹林もないため降雪は少なく、積雪は10cmほどでしかも消えやすく、30cm以上のことは極めてまれだという。また対岸に比べて根雪が遅くて融雪が早く、通例3月には谷間の雪も消え去る。

(坂爪 彩子)

粟島小学校遺跡

1. 遺跡の概要

粟島小学校遺跡は、粟島の東側海岸部のほぼ中央部を占める内浦部落の南端部、粟島小学校の敷地内の、海拔約2～3mの砂地に所在する遺跡である。周辺は黒色砂層で、包含層を有していたと考えられる。昔はここに八所神社があり、明治の大火によって焼失したために寺（観音寺）と神社が隣接しているのは適當ではないということで現在地に移築したという（本間・計良1972）。当遺跡は縄文時代の遺物と古代・中世の遺物が確認される複合遺跡である。

2. 研究略史

遺跡の発掘調査は行われておらず、遺物はすべて表面採集によるものである。縄文時代の遺物と、古代の遺物の存在が確認されている。昭和12年11月、粟島小学校造成作業中に遺物が出土した。

1) 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物については、縄文土器の破片若干と石鏃1点、石棒1点が粟島公民館に保管され、磐舟文華博物館（現在廃館。所蔵品は村上市郷土資料館に寄贈された。）にも若干の縄文土器破片と石鏃が保管されたことが報告されている。『粟島—1972—』において、縄文時代の遺物として紹介されているものは、縄文土器が8点、石鏃が1点、石棒が1点である。

縄文土器は破片に過ぎないが、半截竹管文と見られる2条の隆起線を施すなど隆線を施すものと、縄文を施すものの2種がみられた。隆線を施すものは縄文中期前半・中期後半・後期前半、縄文を施すものは中期後半から後期に位置すると考えられた。石鏃は有柄式の打製石鏃で、石質はドロマイト質の団塊（ノジュール）であり、濃褐色を呈す。石材は粟島の海岸部で多く産出するものである。石棒は長さ57.5cm、中央部断面円形で径8.7cmの大型・打製の石棒である。全体を敲打加工し、両端に割り込みはなく、一端はやや平ら、もう一端はやや細めて平らである。石質は島内で多く産出する粗粒玄武岩質で、全体に茶黒い色をしている。大型・粗製であることから縄文時代中期に位置すると考えられた。なお、石器の石質及び産地は調査当時の新潟大学理学部、西田彰一氏・茅原一也氏によって同定された（本間・計良1972）。

2) 古代の遺物（第2図1～3）

古代の遺物については、須恵器片4点、陶質播鉢片1点、施釉陶器坏の完形品1点の出土が確認されている。以上の遺物は奈良～平安時代の須恵器とされた（本間・計良1972）。

須恵器片で今踏査中実測できたのは2点である（1・2）。いずれも甕の胴部片で、内側に青海波文を有し、外側には「かご目状文様」と呼称する叩き目を有するが、それぞれの叩き目には差異が見られる。陶質播鉢は、叩き目の数は確認できる現状で7目である。

施釉陶器坏（3）についても今踏査中に実測し、新たに資料化した。

完形品で口径13.2cm、器高2.4cm、底径7.3cm、底部器厚0.5cmである。ロクロ成形(右回転)で底部には回転糸切りによる切り離し痕が見られる。「粟島の考古」では付高台の可能性を指摘されていたが、今回の観察で付高台を確認した。黄白色の釉薬は「流掛」の方法により、体部内外面の下位まで人工的にかけ流されている。この釉薬は灰釉の可能性はある。胎土は黄白色で須恵器のものと異なり、硬く高火度焼成されている。時期としては、「本遺跡から一緒に出土している須恵器のある時期、すなわち平安時代後期から末期くらいにそれらの須恵器とともに伝来されたものではなかろうか」(本間・計良1972)とされていたが、今調査の観察ではそこまでの言及は難しかった。

3. 遺跡の現況および遺物の現況について

遺跡は、現在粟島小学校の敷地で、学校の校舎が建っているかもしくはグラウンドとなっており、さらにその周辺は近隣の住宅が所有する畑地となっている。

今回の踏査において、小学校敷地内及び周辺の畑地について表面採集調査を行ったところ、土玉2点、陶器の口縁部破片が1点見つかったほかは、目立った資料を得ることができなかった。遺物の詳細は次節にて述べることにする。

「粟島の考古」において、粟島小学校遺跡から表面採集された資料は、粟島公民館に収蔵されていると記述されていた。今回の踏査で、粟島の歴史資料を収蔵してある粟島浦村の文化財館にこれらの資料を求めたところ、縄文土器8点、石鏃1点、石棒1点について確認することができなかった。古代の遺物についてはその存在を確認することができるものがあり、前述のとおり須恵器片2点と施釉陶器坏1点について実測を行い、新たに資料化した。『粟島—1972—』に記載されている他の古代遺物については、存在を確認できなかった。

4. 遺物の分析 (第2図-4・5)

・土錘(4・5)

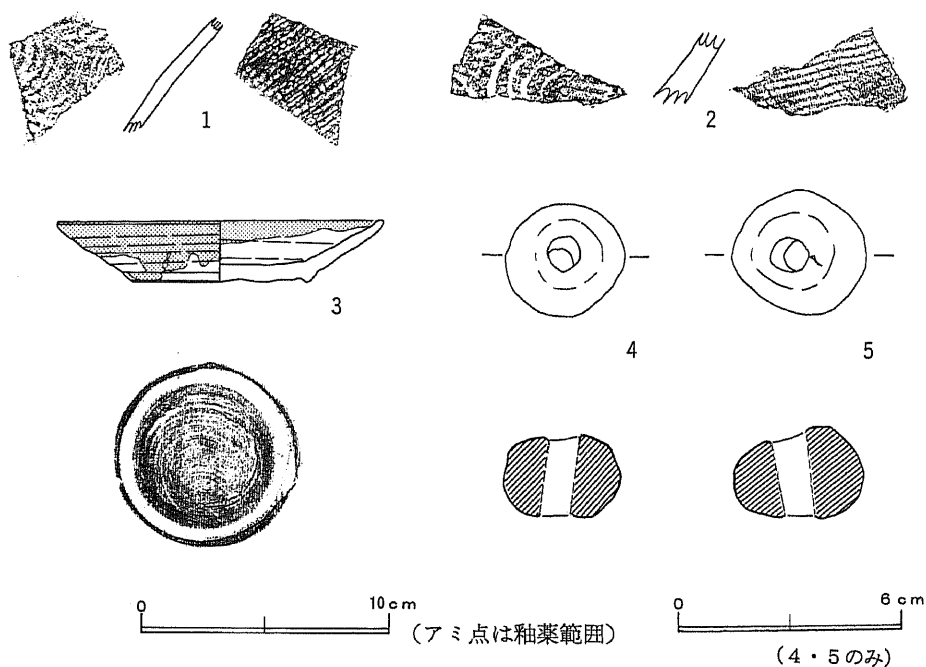
4は球を上からつぶしたような形で、5はさらに不整形である。縄文・弥生土器と同じような軟質褐色のものである。棒状のものに粘土を巻きつけて焼成したものであると考えられる。胎土について土器資料との対比が出来ない為、当遺跡とからめてその時代を特定することは難しい。球形の土錘とするのが妥当ではないかと考える。

5. 小 結

今回の踏査で、当遺跡出土の縄文時代の遺物や古代の遺物の一部について文化財館では確認することができず、後日、粟島小学校や村上市郷土資料館に問い合わせたが、これらの遺物は確認できなかった。資料の保存環境は良いとはいえず、詳細な捜索を行えば見つかる可能性はある。当遺跡は粟島で最も多くの縄文時代の遺物を出土しているが、それらは先史時代の粟島の様相を物語る重要な資料であった。その紛失は痛ましいことである。現在確認されている中でもっとも時代幅を持つ遺跡であり、詳細な調査が行われれば必

ずや粟島の歴史を考察する上で貴重な情報を提供してくれるであろう。今後の分析に期待したい。

(奥山 優一)



第2図 粟島小学校遺跡遺物実測図

第1表 粟島小学校遺跡出土陶器観察表

遺物No.	器種	胎土	焼成	色調外面 色調内面	部位 残存率	口径 底径	残存高 器厚	備考
3	施釉陶器杯	精良	良好	灰オリーブ 5Y6/2 灰オリーブ 5Y6/2	完 —	13.2 7.3	2.4 0.5	ロクロ成形(右回転)、底部切 離し回転糸切り、口縁部周辺 に釉薬かかる

(単位はcm)

第2表 粟島小学校遺跡採集土錘観察表

遺物No.	種別	現長	最大径	孔径(mm)	現長/最大径	色調	備考
4	土錘	2.2	3.1	9	0.71	にぶい橙 5YR7/4	完形。砂粒含む。
5	土錘	2.4	3.6	10	0.67	浅黄橙 7.5YR8/4	完形。砂粒多く含む。

(現長・最大径の単位はcm)

元公民館遺跡

1. 遺跡の概要・研究略史

内浦の町並の中心通りに接して所在する。隣家の屋号を「丸や」というため「丸や脇遺跡」の別称がある。周辺はすべて砂層で、栗島小学校遺跡同様黒色砂層を呈し、包含層を有していたと考えられる。遺物は、「石棒か?」とされる石器 1 点のみが確認されている。元公民館遺跡については、栗島小学校遺跡からは約200m 程離れた地続き地帯で近距離にあることから、同時期の遺跡、すなわち縄文時代中期後半から後期前半あたりに相当する、と考えられている（本間・計良1972）。

2. 遺跡の現況及び遺物の現況について

現在、遺跡周辺は宅地となっている。今踏査では表面採集は行わなかった。唯一の出土遺物である石器について、「栗島の考古」（本間・計良1972）の記述では、栗島公民館に保管されている、と記述されていた。2003年 7 月 5 日の踏査時には栗島浦村の文化財館に保管されていることが確認できたので、新たに実測図を作成した。

3. 遺物の分析（第 3 図－6）

当遺跡出土の石器の特徴について観察したことを述べる。「栗島の考古」において、この遺物は石棒である可能性が指摘されているので、説明の便宜上石棒における部位名称を用いることにする。

実測の結果この石器は長さ20.7cm、最大幅6.9cm、断面短径5.7cm、長径6.2cmであった。材質は本間氏・計良氏の先行研究において安山岩とされていたが、観察の結果角閃石の結晶が見られ、材質は角閃石安山岩であるといえる。断面の形状は楕円形である。頭部と見られる部分は判然とし、稜状を形成している。丁寧に磨いて造り出され、その部分のみ表面が滑らかである。約3/5が欠損しており、この部分より下について稜線は明瞭でない。胴部と見られる部分は、頭部に比して太い幅を持つ。その下部片面に大きく割り取られたと思われる剝離部があり、約3/7程度が欠損している。頭部欠損面と、欠損面を中心とする胴部裏面が灰赤色の色調を呈していることが観察された。これは、この石器に何らかの熱が加えられたことにより変色した結果であると考えられる。明確な意図を持った破壊とは考えづらいが、変色が欠損面にのみ見られるので欠損と変色は人為の行動による何らかの関連性を持っていると考えられる。

栗島において、棒状の石器は元公民館遺跡出土のものの他に、近隣の栗島小学校遺跡から 1 点出土しているが、栗島小学校遺跡のものは敲打製成で、無頭であるうえに、粗粒玄武岩という在地の石材を使用しており、単頭で、栗島では産しない角閃石安山岩である元公民館遺跡の石器とは関連性を見出しにくい。

元公民館遺跡の石器について、「栗島の考古」においては、石棒のほかにこの石器を漁労具の石錘と見る向きもあった。これは、佐渡地方の弥生時代末～古式土師器の時期に見ら

れる茄子形の石錘の出土例を受けたものであると考えられる。これらの石錘は、一見すると石棒に似た形状をしている。石棒とくらべて胴部が若干短く、長さは約20cm前後で、30cm以上のものもある。しかし、現状では粟島には佐渡の石錘と同時代の遺物は見られないため、石棒という評価に比べて根拠に欠ける。

石棒は、炉とつながる出土状況や火熱による折損変色から祭祀と火の関係、副葬品としての出土など、様々な呪術的機能を発揮したという説がある(小林2002)。その説でとりあげている中期末～後期初頭の炉に配置したような大型品や晩期のほっそりした小型の類でもなく、元公民館遺跡の石器は太くて小型のものであるが、大きな欠損と欠損面の比熱痕と見られる変色は、この石器の性格を石棒とする説を支持するものである。「粟島の考古」では、「石質が安山岩質であり、この石質は粟島から産しないことから、対岸本州の岩船地方あたりからの搬入を考えねばならない」(本間・計良1972)という評価を受けている。粟島からは産しない安山岩(角閃石安山岩)を用いていることと、岩船地方、とりわけ村上市内の海岸部、上海府の海岸段丘・河岸段丘上、標高40～60mの付近で縄文中期から後期の遺跡が点在し、石棒の出土例がある縄文時代の遺跡が存在することから、この評価は、現時点では妥当なものであるといえよう。

元公民館採集の石器は石棒として考えれば、長さに比して幅が太く、頭部が三角状で、明瞭な段を作り出すことによって体部と区画されていることから、中野氏・諫山氏の新潟県出土石棒の編年表(中野・諫山1999)に当てはめれば、縄文時代中期から後期にかけてのものと考えられる。しかし、形状から判定できる事実のみでその性格を判断することは危険である。当遺跡の石器と岩船郡から出土する石棒、佐渡で出土する石錘、もしくは佐渡で出土する小型の石棒類との石材・形態の比較を検討する必要があるのではないだろうか。粟島が海に囲まれている以上、新潟県域以外からの搬入も否定はできない。

4. 小 結

遺物が1点のみしかなく、さらにはその性格の判断さえ難しく、遺跡についての言及はもちろん他の出土遺物がなくては詳しい分析には至らない。粟島島内では、とりわけ先史時代の様相を物語る資料が少なく、当時の状況を分析しにくいことは大変残念なことである。絶海の孤島である粟島と、岩船地方・佐渡島やその他の地域との先史時代の関係の検討は、島嶼の文化の検討を深めるものである。何より同時代の遺物の資料点数が絶対的に不足しており、分析が困難な状況を打破するには、正式な調査・研究が待たれるところである。

(奥山 優一)

粟島浦村文化財館所蔵出土地不明遺物

1. はじめに

粟島浦村における考古遺物の所在は『粟島—1972—』においてそのほとんどが「粟島公民館」とされていたが、踏査時現在それら遺物の大半は粟島浦村の「文化財館」という場所に、民俗文化財などと共に一括して収蔵されていた。今踏査中、『粟島—1972—』記載の遺物の確認を主たる目的として文化財館内を調査した結果、『粟島—1972—』記載の遺物のほとんどが確認され、これらのほかに『粟島—1972—』未記載の遺物が確認された。本項ではこれらのうち出土地不明の遺物について述べる。

2. 遺物について（第4図—7・8）

・珠洲焼 片口鉢（7）

器高13.6cm（片口側）、12.6cm、口径約35cm、底径約12.2cm、焼成は普通である。成形法はロクロ左回転で、底部調整は静止糸切りである。口縁部は片口の左側を含め1/2ほど破損している。内面に卸目は認められない。

・石皿（8）

形状から推測し、石皿とした。この石皿の特徴は、左右に3つずつのコブ状の突起、上に大きなコブ状の突起を持っている。他の特徴として、凹部があまり深くない。長さ37.5cm、幅22cm、高さ約7.5cm。石材は安山岩である。縄文時代所産の物と考えられるが、石材が安山岩であるため、外部からもたらされたものである可能性が高い。

（田丸 司）

第3表 粟島浦村文化財館所蔵出土地不明遺物観察表

遺物No.	器 種	焼 成	口 径	器 高	胎 土	備 考
			底 径	器 高（片口側）	色 調	
1	珠洲焼 片口鉢	普通	35	12.6	精良	成形法ロクロ左回転、底部調整静止糸切り
			12.2	13.6	7.5Y 5/1	底部にくぼみあり

遺物No.	器種	石材	現長	幅	高さ	備考
2	石皿	安山岩	37.5	22	7.5	右側面に欠損あり

（単位はcm）

役場診療所遺跡

1. 遺跡の概要

内浦部落のほぼ中央部に城山へ通ずる道路があり、役場と診療所が所在している。ここは街並より山地へ向かったやや高めの傾斜地で、海拔は約10mである。昔このあたりに寺があったという。この役場診療所所在地から出土した遺物は、陶質器物が主である。

資料の多くは鎌倉後期から室町前期ごろのものであって、観音堂遺跡と同様に、役場診療所周辺に見られる石造種子仏等との関連がうかがえる。今回、踏査を行なったが、建物が建っていたため遺物を採集することはできなかった。

2. 遺物の現況について（第4図－9～14）

以下の遺物は粟島浦村文化財館に所蔵されていた。

- ・須恵器 坏身（9）

胎土は泥岩を含む、焼成は瓦質、不良。ロクロ成形で右回転である。口径は13cm。口縁部下約2.5cmの部分が残存している。色調は灰白色（10YR8/1）である。

- ・須恵器 瓶口縁部（10）

胎土は黒色粒子、焼成は良好。口縁部に自然釉が見られる。口径は約11cm、上部約2cmが残存している。

- ・陶器片（11・12）

11、12共に裏は無紋で、11の表は条線状叩目文を羽状にしたものである。12は4本の縦と横の凸線で四角のますをつくり、その中へ×形の凸部を入れた文様で形成されている。11は甕の破片と考えられる。

- ・珠洲焼 甕口縁部（13）

口辺が大きく表面に条線状叩目文を横位につけている。

- ・土師器（かわらけ？） 底部片（14）

底径は約7cm、厚さは0.5cmとなっている。今調査中に新たに確認した遺物である。かわらけであると考えられる。外面手持ちヘラ削りが認められる。

（田丸 司）

まきだいら

牧平遺跡

1. 遺跡の概要

この遺跡は粟島浦村字上牧・下牧に所在する遺跡である。粟島の最北端の海岸段丘台地上に位置し、以前は放牧地であったという。過去に宮田正三氏（当時粟島中学校勤務）が石鏃を採集し、調査の為に来島した県外の研究者にそれを提供したと言われる。石鏃の明確な出土地点は不明であるが、広い平坦地があり、遺跡が存在する可能性がある。

1992年に新潟県教育委員会によって粟島の遺跡分布調査が実施された。その際に、本遺跡では磨製石斧（第4図-15）が採集され、現在文化財館に収蔵されている。

2. 遺跡と遺物の現況について

遺跡付近は耕作地と藪になっている。今回の踏査では採集遺物は特に得られなかった。牧平に畑を持つ方の話によると、最近畑の中で遺物を見ることはないそうである。

3. 遺物の分析

石鏃の情報については、詳細不明である。

磨製石斧については、出土地点や出土状況は不明である。最大長は9.4cm、最大幅が4.8cm、最大厚が1.2cmであり、色調は灰色をしている。石材には島内の石と思われる頁岩が使われているようである。両面ともにうっすらとではあるが研磨痕が見られ、全体的に滑らかな部分が多い。刃部の半分近くに欠損が見受けられる。

磨製石斧は一般的に弥生後期以降に始まる鉄斧の導入段階までは、用途に適合した形態に加工されて存続し、基本的な生活の一面を担っていたとされる。

寺野遺跡

1. 遺跡の概要

粟島浦村字野々沢740の21、通称寺野に所在する。海岸に面する台地上に位置する。工藤孝雄氏が粟島浦村小学校校長在職中であった昭和22年から27年頃、この遺跡の発掘を行い、多数の土器片が出土した。しかし現在まで伝えられている遺物はなく、出土地点も不明である。『粟島』の「目録」には「縄文土器」「石鏃」とあるが、それらについては未確認である。

2. 遺跡と遺物の現況について

今回は踏査を行っていない。『粟島』に記載されている遺物についても不明である。

もぎきばた 茂崎畠遺跡

1. 遺跡の概要

この遺跡は、粟島浦村字野々沢710（通称茂崎畠）に所在する製塩遺跡である。粟島における製塩遺跡は一箇所、従来縄文時代の「茂崎遺跡」として記載されていたものを1970年代の調査で製塩遺跡と訂正し、通称を「茂崎畠製塩遺跡」とした。それに伴って「目録」も「縄文土器」から「製塩土器」へ、「石皿」から自然石へとそれぞれ記載を訂正した。

古代に於ける製塩の立地環境としては、海藻がよく繁茂する静かな海で、水・燃料の便が良い所であるから、茂崎畠はそれらの条件を満たした製塩に適した土地柄であったといえる。土器製塩という作業自体が、土器に海水または鹹水を入れ、煮沸して塩をとるものである。したがって、その関係上、例外もあるがその場で煎熬・焼塩などの土器製塩の作業を実施したと思われる。この点から見ても茂崎畠遺跡は海岸沿い（磯）の立地であり佐渡との立地の類似性からも製塩遺跡として妥当といえよう。

2. 遺跡と遺物の現況について

現在は畑になっている。今回の踏査では特に表採は出来なかった。

『粟島』に記載されている遺物については現在文化財館に所蔵されている。胴部破片がまとめられて袋に詰められていたが、今回は点数の確認などは行わなかった。また、底部や口辺部の破片は確認できなかった。

3. 遺物の分析

『粟島』によれば、出土した製塩土器の破片は約120点で、出土地点は下茂崎と上茂崎の中間辺りであったという。土器片の内訳は、口辺部破片が6点、底部を含む破片が3点、円筒状の側面に2孔を有するもの1点で、他は胴部破片である。これらはいずれも輪積手法による粗製土器で、大体赤褐色から黄白色を呈し、二次的に火を受けた小破片であった。胎土に細砂が僅かに混じっているものが多い。その器形については、まず、口辺部は①口唇部が細まらずに比較的胴部の厚さを有するものと、②口唇部が細まっているものとに大別できる。外側には輪積の跡を残すが、内側にはハケメ調整が見られることから、内側整形を可能にする胴部が僅かに開いた器形であると考えられる。そして底部はいずれも平底をなす。以上の部位の特徴から平底で胴部の開きはあまり大きくないバケツ形ないし鉢形の器形が考えられる。この形式は近くでは「佐渡式製塩土器」の器形に類型を求めることが出来るという。

円筒状の側面に2孔を有するものについては、円筒形有孔土器と思われ、一端のふさがった円筒形の側面に2孔を有したものであると考えられる。円筒有孔形である所から、この土器そのもので直接製塩を行うのではなく、製塩過程における製塩用具と考えられる。用途としては製塩土器をのせて製塩するための脚台であったと推察される。

粟島の製塩土器は佐渡式製塩土器に類似する点から見て、8世紀（奈良時代）を中心と

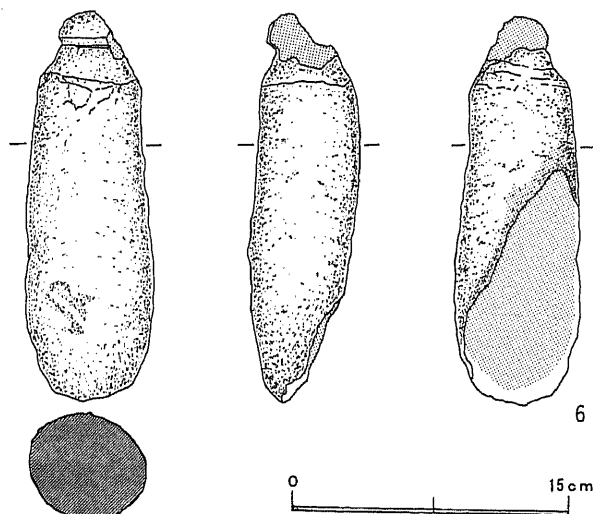
したその前後の時期に求めるのが妥当と思われる。

県教育委員会による確認遺跡

1. 概 要

1992年に県教育委員会により分布調査が行なわれた。その際『粟島』には記載されていない遺跡からも遺物が採集されている。千刃遺跡と名付けられ、採集された遺物は須恵器片数点であるというが、詳細は不明である。

(森合 桂子)



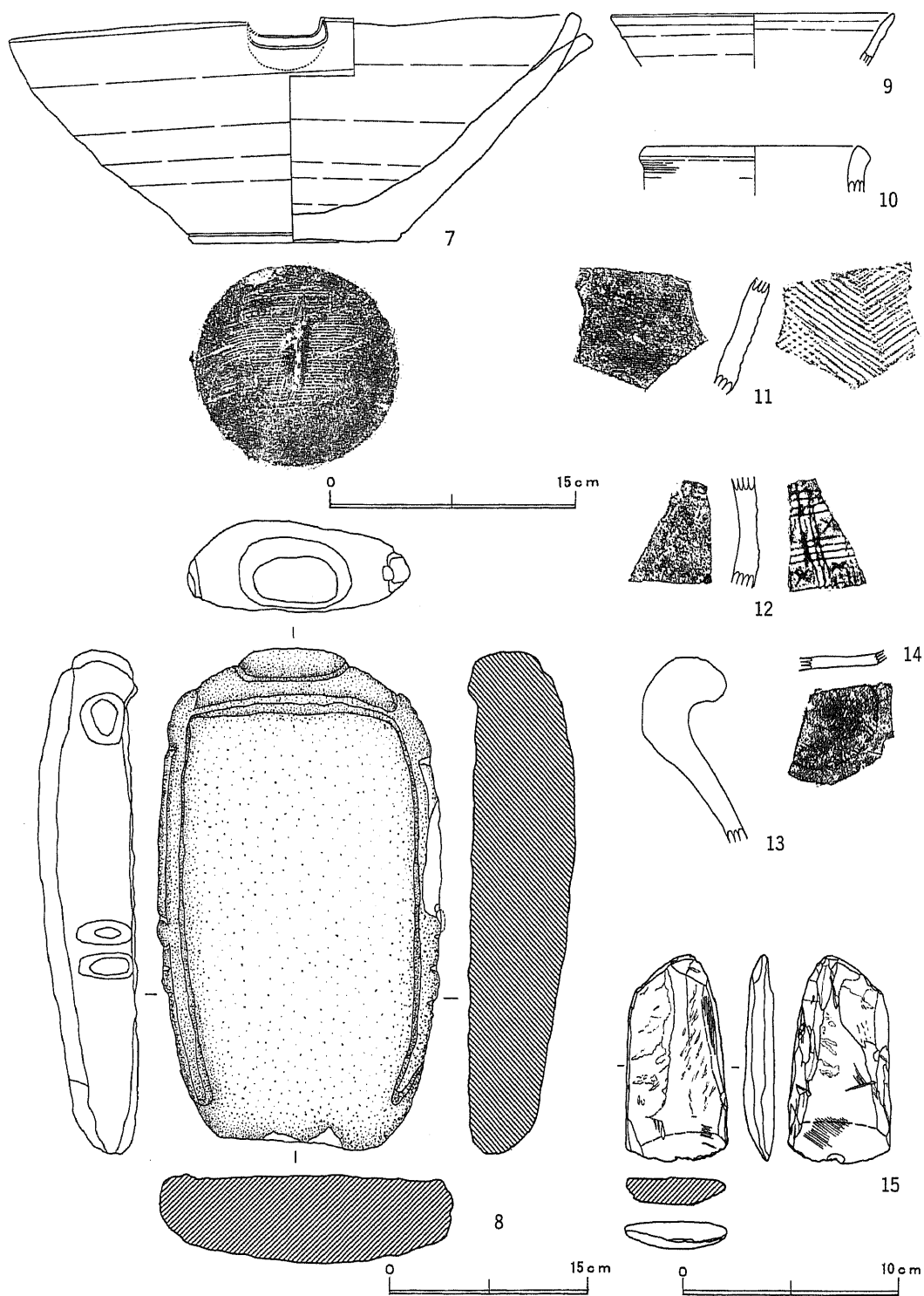
第3図 元公民館遺跡石器実測図

(アミ点は被熱痕跡)

第4表 元公民館遺跡石器観察表

遺物No.	種別	石材	長さ	幅	色調	最大径	欠損部位	備 考
6	石棒?	角閃石安山岩	20.7	6.9	灰色	縦5.7 横6.2	頭部3/5 胴部3/7	欠損部に被熱と見られる 変色(灰赤色)あり

(単位はcm)



第4図 出土地不明(7・8)・役場診療所遺跡(9～14)・牧平遺跡(15)遺物実測図

教員住宅遺跡（観音堂遺跡）

1. 遺跡の概要

内浦の南寄りにある観音寺の横手に観音堂（やす突観音堂）があり、その後ろ側の教員住宅のある一帯が遺跡で、墳墓跡とされる。教員住宅があるところは以前観音堂を取り囲むようにして土手があり、昭和42年12月にこの土手を削って宅地造成が行なわれた。その際に樗の根元あたりの土手中から石造五輪塔数基が1列に並んだ状態で出土、五輪塔の前あたりからは中世のものと思われる骨蔵器などが出土した。現在は観音堂横手に五基（ほかに残欠若干）が並んでおり、上には雨除けがかけられて保存されている。観音堂向かいの礧石塔婆群も同様の状態である。

2. 遺物の分析（第5図-16～23）

内浦地区にある文化財館に保管されている遺物は壺6点分（そのうち完形品は4点であるが1点は島外）、甕2点、片口鉢2点で、いずれも珠洲焼である。出土状態については不明な点が多いが骨蔵器であったと考えられ、壺の蓋として片口鉢が使われていたようである。（吉岡 1994）によるとこれらの時期は壺1、3がIV期（13世紀末～14世紀末）、壺2がIII期（13世紀後半）、壺4は不明、甕1がI期（12世紀後半）、甕2はIII期、片口鉢はいずれもIV期に位置づけられるものと考えられる。それぞれの遺物についての概略は以下のとおりである。

壺1（16）：器高21.2cm、底径10.4cm、口径9.7cm、胴径18.5cm、頸部は1、2に比して開きが少なく、全体的にゆがみがあり中ほどがやや膨れている。ほぼ完形品で口縁のところのみ円周2分の1ほどが破損している。製作技法はロクロ成形で右回転である。底部には静止糸切り痕が見られる。色調は外面が灰色で底部から胴部にかけて部分的に煤が付着しており胴部にはヘラでひっかいたような傷がある。内面は緑灰色である。胎土には海綿状骨針が見られ、珠洲の方からの移入品であると推定される。時期はIV期と推定される。

壺2（17）：器高19.7cm、底径8.4cm、口径10.4cm、胴径17.1cm、ほぼ完形で、頸部はやや開いた形状をしており肩部にはヘラ描きによる「×」の刻印がある。口縁部分が4分の1ほど、底部は6分の1ほど欠損している。底面は静止糸切りである。外面は左回転のロクロ成形が施されている。胎土には海綿状骨針が見られ、色調は灰色である。時期はIII期と推定される。

壺3（18）：器高19.7cm、底径8.8cm、口径10.2cm、胴径17.9cm、頸部はやや開いている。肩部から胴部にかけて櫛角波状文をめぐらし、肩部に「乙」状の刻印がみられる。器面全体は他を比較して光沢を有す。時期はIV期と推定される。

壺 4 (19) : 器高13.9cm、口径 不明、底径8.6cm、胴部から口縁部にかけてが欠損している。製作技法はロクロ成形で、左回転である。底部には静止糸切り痕が見られる。焼成は堅緻で色調は灰白色である。時期は不明。

壺 5 : 不明。

甕 1 (20) : 器高42.3cm、底径12.6cm (平底)、口径24.8cm、胴径39.0cm。数個に破損したものを復元したものである。頸部より上はロクロ成形である。表面には綾杉状叩打が施されており、肩部には印花文の刻印が3つある。内面には無文の当て具痕が見られる。胎土は径1～3mmの白色粒子(長石)を1%含む。焼成は普通。色調は灰色。時期はI期と推定される。

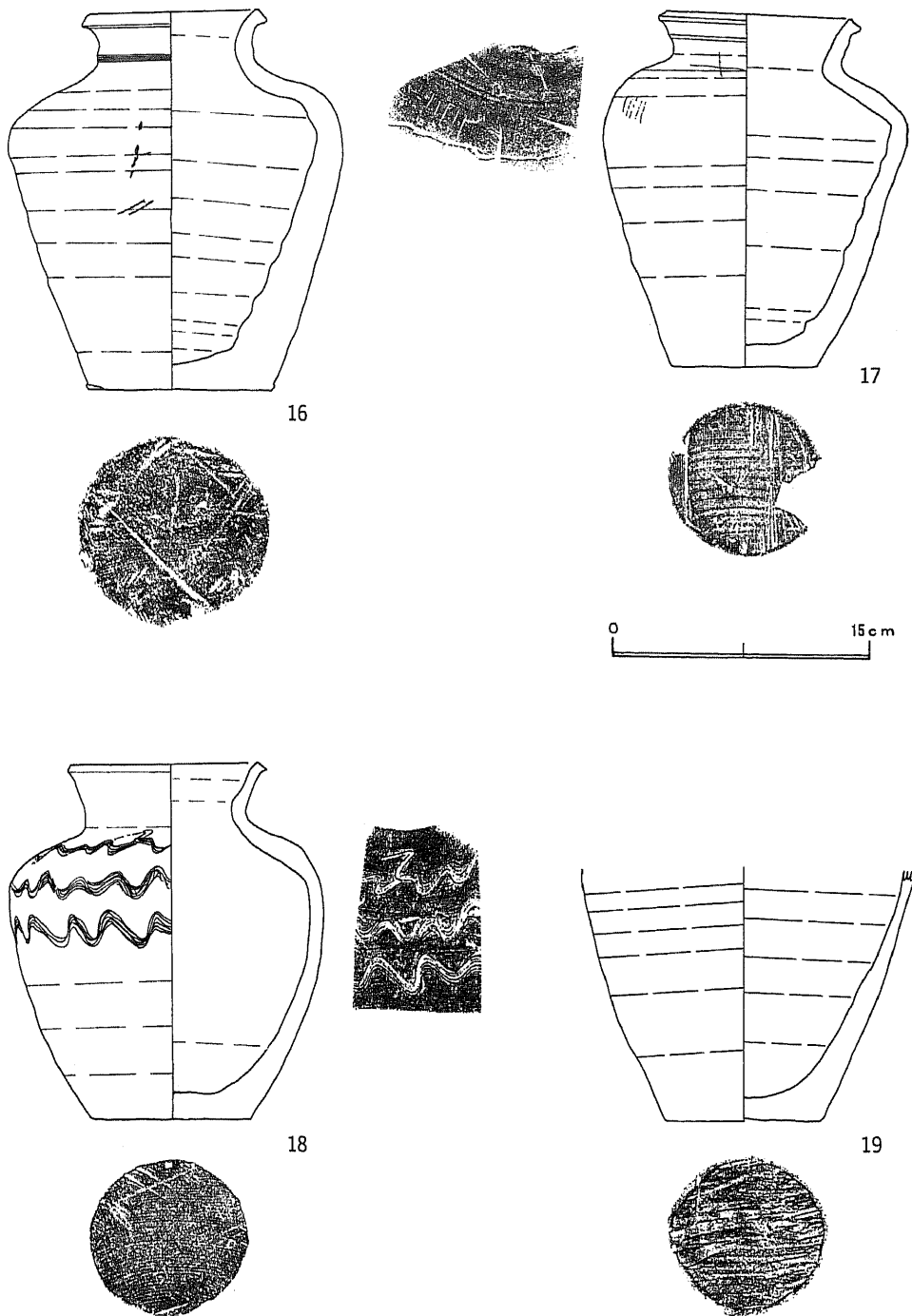
甕 2 (21) : 器高34.6cm、底径8.0cm (平底)、口径15.6cm、胴径26.5cm、器厚約1.0cm、底部3分の1は欠損しているが、底部中央は意識的に穿孔した可能性がある。底部切り離しは静止糸切りである。底部と口縁部周辺はロクロ成形で、胴部は叩打成形、内面には押圧痕、外面には綾杉状叩打が施され、なで肩で全体的に薄作りである。肩の部分にはへら描き文があり、「小」のようなものである。これは吉岡氏によると「个」という記号文であると推定される。胎土はチャートを含む。色調は外面がオリーブ灰、内面が緑灰である。時期はIII期と推定される。

片口鉢 1 (22) : 器高10.5cm、口径23.7cm、底径11.0cm。胴部にへら描き文と思われる文様がある。ロクロ回転は左である。底部は静止糸切り。胎土中に径2～3mmの白色粒子(長石)を2%含む。色調は内外面ともに暗灰色を呈している。胴部中位に粘土紐巻き上げ痕を残している。時期はIV期と推定される。

片口鉢 2 (23) : 器高14.5cm、口径32.0cm、底径12cm。径1～2mmの白色粒子(長石)を2%含む。色調は上部が灰色、下部は内外面ともに赤褐色で焼成は不良。外面には左回転のロクロ目があり、内面には15本ほどの浅い櫛目状の卸目がつけられている。底部は欠損しており、胴部も若干欠けている。時期はIV期と推定される。

3. 小 結

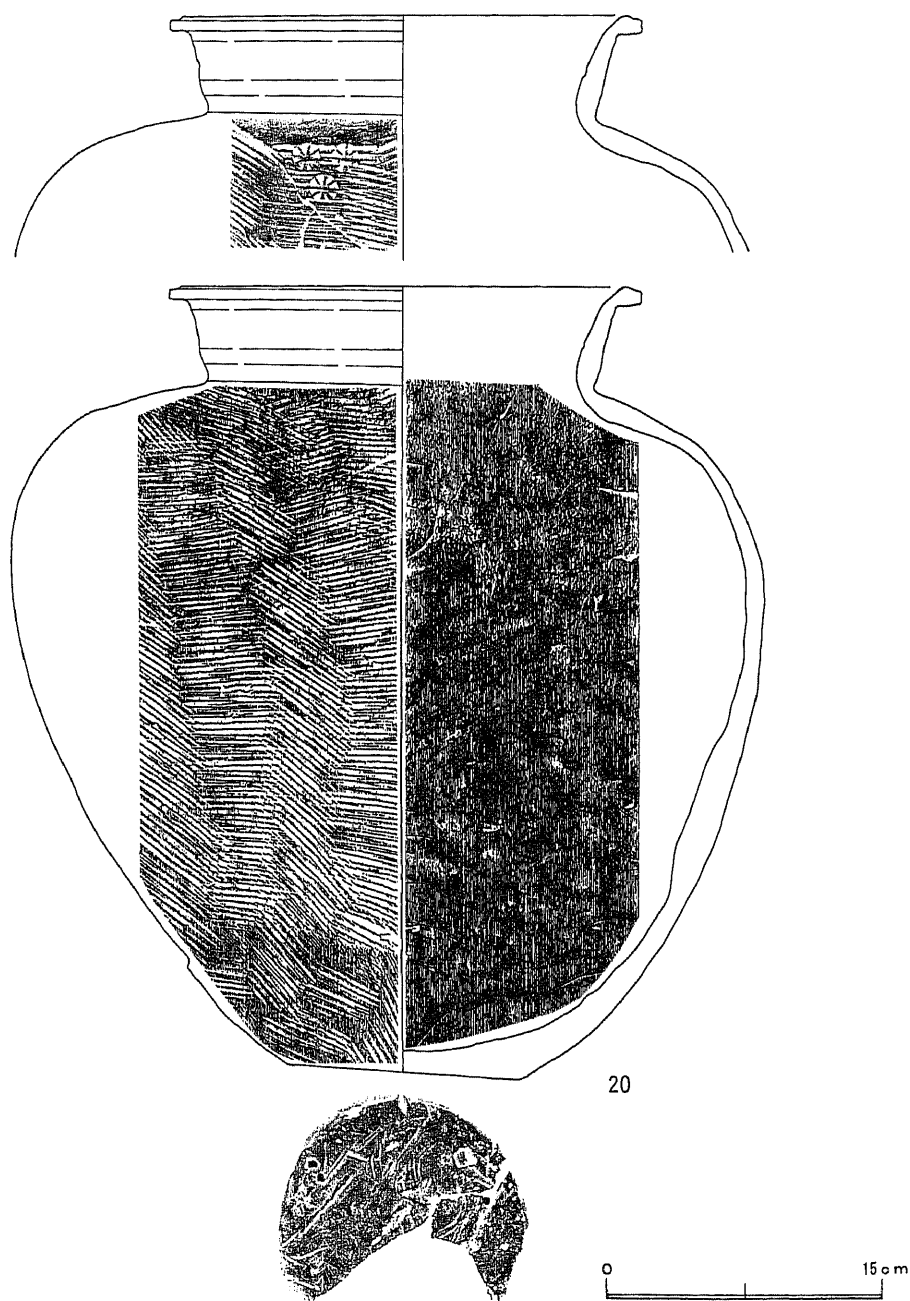
粟島は「小泉庄」の一部として鎌倉時代後期から色部氏の支配下となった。民は上納金の他に年4回の上納品を納めることを課されていた。上納品は主に島の特産物で、鮑、海苔、塩などであった。上納を受けた色部氏ははるばるやってきた使者を引き出物でもてなしたとの記録が「義経記」に残されている。甕類はこのような上納品を入れる容器として使われていたものと推定される。鎌倉時代前期には能登半島以北の北東日本海域は珠洲焼を中心とした中世陶磁器の流通圏が形成されていた。その様子を示すものとして南は能登



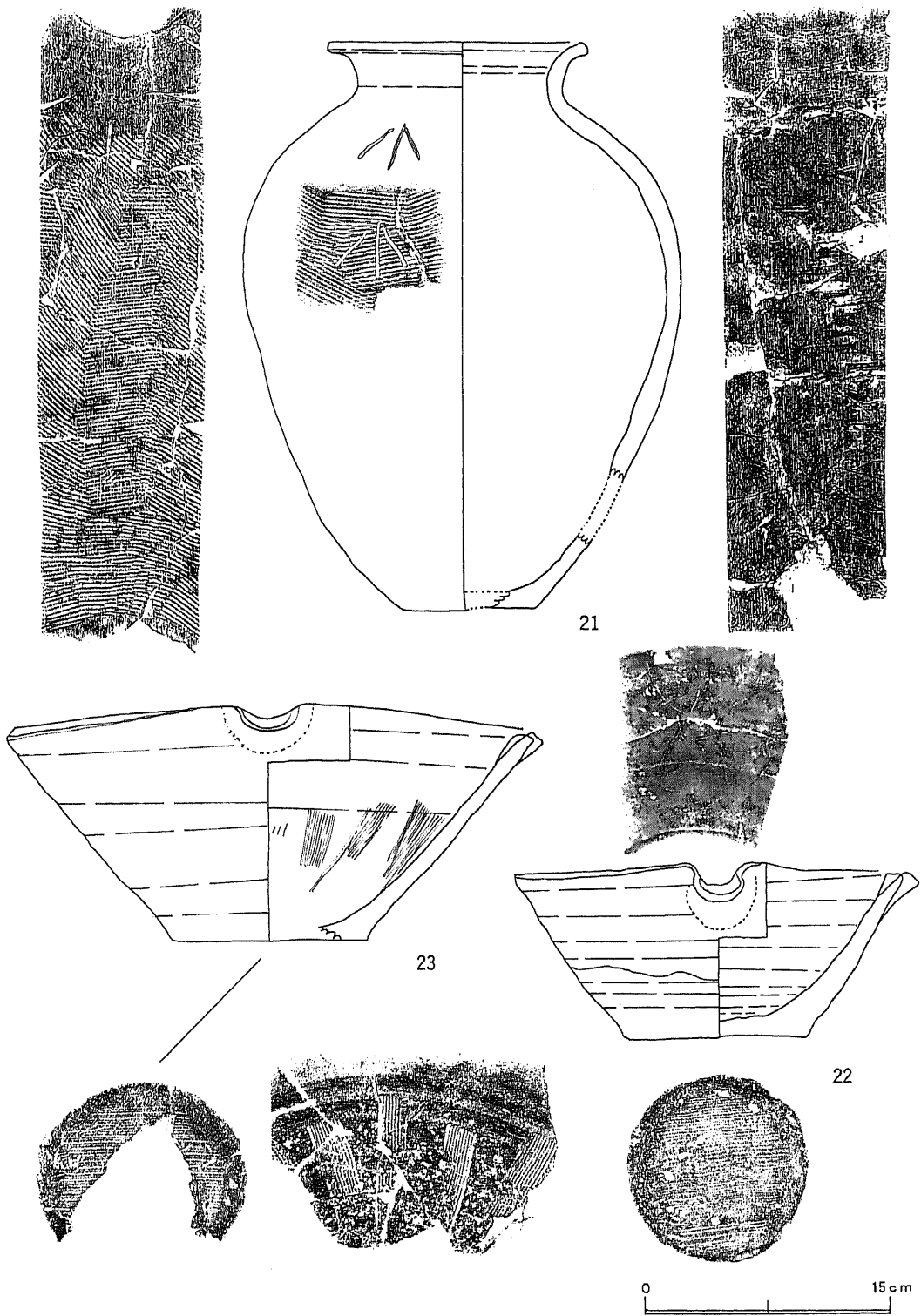
第5図 教員住宅遺跡土器実測図(1)

半島沿岸から北は山形県飛島沖にかけての海底から珠洲焼の甕などが発見されている。新潟県北部の岩船津でも珠洲焼の大甕が引き上げられた例がある。岩船津は阿賀野川以北の港の拠点として重要な位置を占めており、京や奈良から敦賀を経由して都の特産品が運ばれていた。珠洲焼もこのルートに乗って新潟津や岩船津などで交易されたものと思われる。

(大野 安希)



第6図 教員住宅遺跡土器実測図(2)



第7図 教員住宅遺跡土器実測図(3)

まとめ

最後に、幾つかの問題について検討し、まとめとしたい。

①牧平遺跡採集の磨製石斧

牧平遺跡採集の磨製石斧は石材に頁岩を使用している。側縁付近に剝離痕の残るもので、仕上げは粗雑であるものの、刃部の刃研ぎは入念である。刃部に刃毀れが認められ、未製品ではないことがうかがわれる。大きさは、阿部朝衛氏による分類（阿部1987）を基準にすると、大型と小型の中間に位置するが、扁平で意外と重量感に乏しい。形態的には、頭部が平らでなく、端部が突出する。その突出部位が中央になく、左右対称ではない。新潟県内の磨製石斧産地は大きく南の西頸城と北の三面付近に分けられるが、佐渡でも小木の長者ヶ平遺跡をはじめとして島外から蛇紋岩や滑石などの素材の石材を搬入して磨製石斧を製作している。しかし、粟島出土の磨製石斧は粟島の在地石材で作られた可能性が高い。

②石 棒

元公民館遺跡出土の石製品は比較的短小で、石棒と有頭石錘のどちらとも決しがたい形態的特徴を有している。残念ながら重量を量ることができなかったが、径約6cm、長さ約20cmの本資料は石錘としても問題のない範囲であろう。しかし、欠損部に被熱痕と考えられる灰赤色の変色があり、石棒の可能性を示唆する。巻町豊原遺跡出土の石棒（前山1994）にも被熱痕が認められ（註1）、石棒が火の近くで使用された、あるいは積極的に火を伴う祭祀に使用されたことをも暗示させる。

山本暉久氏によれば、中期中葉期には、山梨県上石田1号住例、長野県北方I-8号住例、東京都清水台F5号住例など炉址からの出土が注意されるとされ、中期後半期には炉址内出土、炉石材への転用例を含めると、住居址内床面上出土例の半数以上を占め、石棒が炉址と深い関係を有していたことをうかがわせるという。さらに、長野県曾利28号住例や岐阜県堂の上6号住例のように、石田炉址脇に有頭石棒を樹立させている例からみても、石棒と炉址、すなわち火との結びつきの強さに注目しておく必要があるとされる（山本1983）。これは中期末・後期初頭期に入っても同様で、石田炉脇から直立して出土した東京都船田C-30号住例や有頭石棒が炉石材の一部に用いられた東京都西中野敷石住居例があげられている（山本1983）。以上から、元公民館遺跡出土の石製品は石棒としてよいであろう。南関東から中部にかけての当該期の石棒の扱われ方が粟島まで波及していることを示している。

本遺物は、中野純・諫山えりか両氏分類（中野・諫山1999）の単頭石棒1段8類とされる、頭部先端が三角状を呈し、溝によって体部と区画されたものに近い。また、これには体部が張るものが多いとされる点でも同様な形態的特徴を有する。中期中葉～後期中葉を主体とし、後期後葉まで散見できるとされ、付近の粟島小学校遺跡で先の中期前葉の土器以外に南三十稻場式関連の後期前葉の土器（註2）が出土していることと矛盾はない。

なお、今回の調査では粟島小学校遺跡で過去に出土したとされる無頭の石棒とされるものは所在を確認できなかった。ちなみに、報告されている図によると多孔質の玄武岩とお

ばしき石材で、実際報告では「粗粒玄武岩質」とされ、色調も玄武岩に特有な「茶黒い色」をしていると記されている。地元の石材を使用している可能性が高い。形態的には、一端が四角くやや平らで、他端が尖り気味である。中野・諫山両氏分類（中野・諫山1999）の無頭石棒a類に近いものであろうか。時期は中期中葉～後期前葉に認められるとされ、他に粟島小学校遺跡で確認されている縄文土器の時期と符合する。大きさは径8.7cm、長さ57.5cmの中型品である。

③彫刻石皿

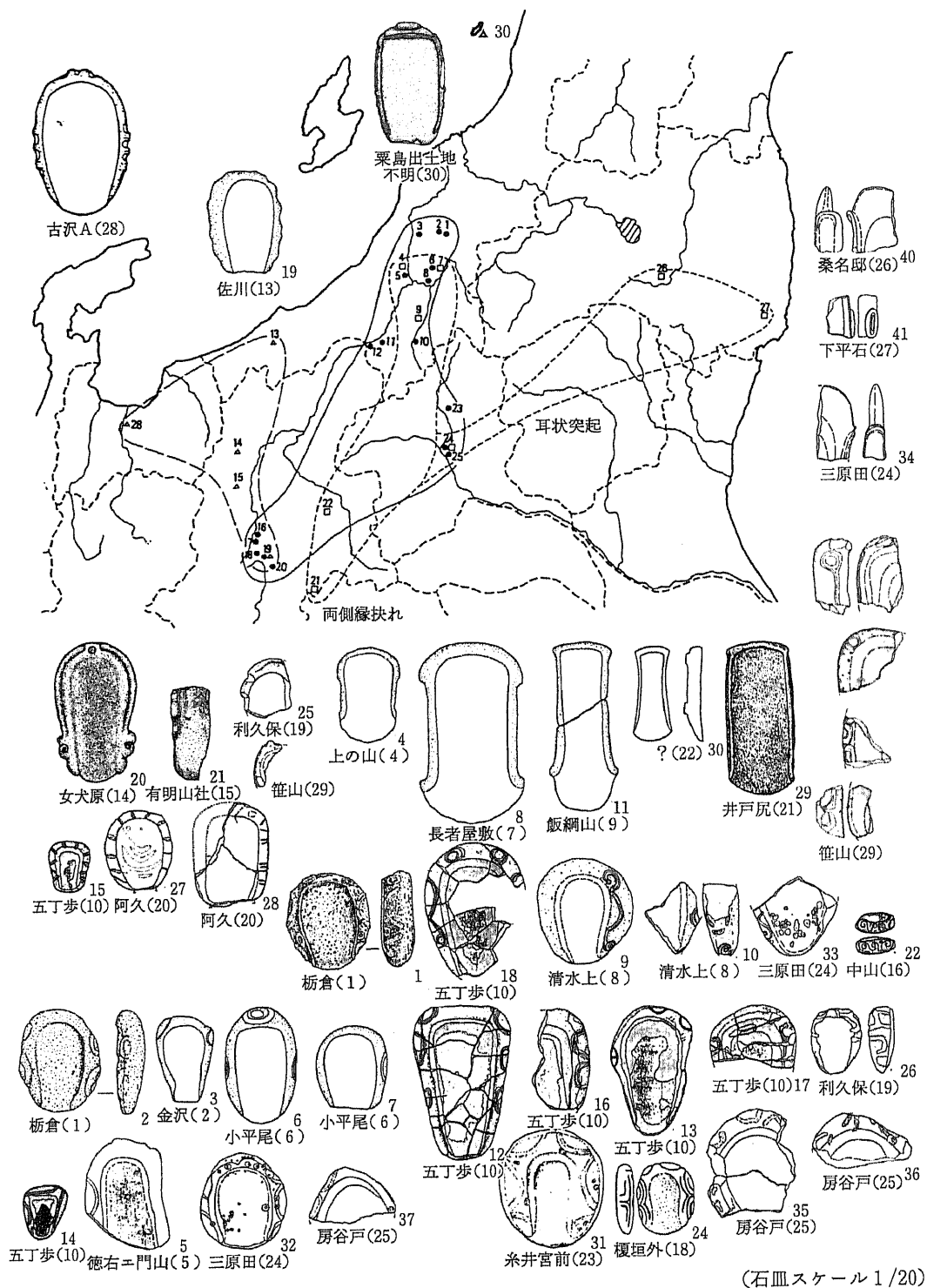
出土地不明ながら、興味深い資料である。周縁の高まりのうち一方を解放して掻き出し口としていることや、立ち上がった縁に広くて平坦な凹み部をもつこと、さらに楕円形に近いことなどから、安達厚三氏分類（安達1983）のIV a類に相当する。安達氏は石皿の中には周縁や側縁に文様や挟り込みを施したり、コブ状突起をつけた装飾石皿とよぶべきものがあるとしているが、文様をもつものはII a・III類だけで、コブ状突起はIV類にも見られるとしている（安達1983）。まさに、本例は、そのIV a類ということになる。そして、このIV a類は縄文前期から後期にかけて認められるという（安達1983）。一方、この種の石皿は、高橋保雄氏分類（高橋1992）J類の石皿とされ、その分布は長野、富山、新潟南部にあり、この石皿が確実に粟島島内で出土したものならば、その分布からは離れた飛び地のような存在になる。もっとも、海路水上交通で粟島までもたらせられたと考えれば説明はつく。時期は、他例が長野県有明山社、女犬原の前期中～後葉、同・梨久保の中期、富山県古沢Aの晩期とされているが、古沢Aからは中期前葉の土器も出ていることから前期～中期に絞られる可能性があるとする（高橋1992）。粟島小学校遺跡から出土している縄文土器には剣野E式に類似した新保・新崎式等の北陸系の縄文中期前半の土器があり、この石皿も土器とともに海流に乗って彼の地よりもたらされたものと想定される。粟島例と類似する古沢A例、佐川例等が、内陸部でなく日本海沿いに分布する点は注目される。

両側縁が挟れるI類は八ヶ岳山麓から群馬の赤城山西麓（三原田遺跡の近隣の瀧澤石器時代遺跡でも確認）（堀口・谷藤1997）、さらに新潟の魚沼地域にかけて分布する。彫刻石皿はその後十日町盆地の笹山遺跡（菅沼・阿部・石原・中澤1998）で類例を増加させた。

このたび粟島で確認された彫刻石皿は、文様の対称性からすると石坂氏分類のI・J類との関連性が示唆され、特にJ類との関係が濃厚である。そのうち佐川例との類似性が認められる。すなわち、両側縁と後方小口へ左右対称にコブ状隆起が作出される。その他粟島例と同様に後方左右の角にコブ状隆起が作出される例に梨久保例がある。また、コブ状隆起ではないが、円弧を陰刻するもののうち、栃倉・小平尾・五丁歩各例のような粟島例と似た左右対称例が存在する。

なお、石皿は石棒とセットで陰陽を表現した出土状態を示すものがあり、彫刻石皿の中には形態的特徴からも性をシンボライズしているものがある可能性がうかがわれる。

ところで、粟島の石皿は磨り面が浅く、あまり使い込んでいない。長期の定住ではなかったのであろうか。あるいはまた、漁労資源に恵まれた粟島では、植物性食料の獲得にさほど大きなウェイトを置いていなかったのであろうか。



第8図 彫刻石皿分布図(高橋保雄1992改図)

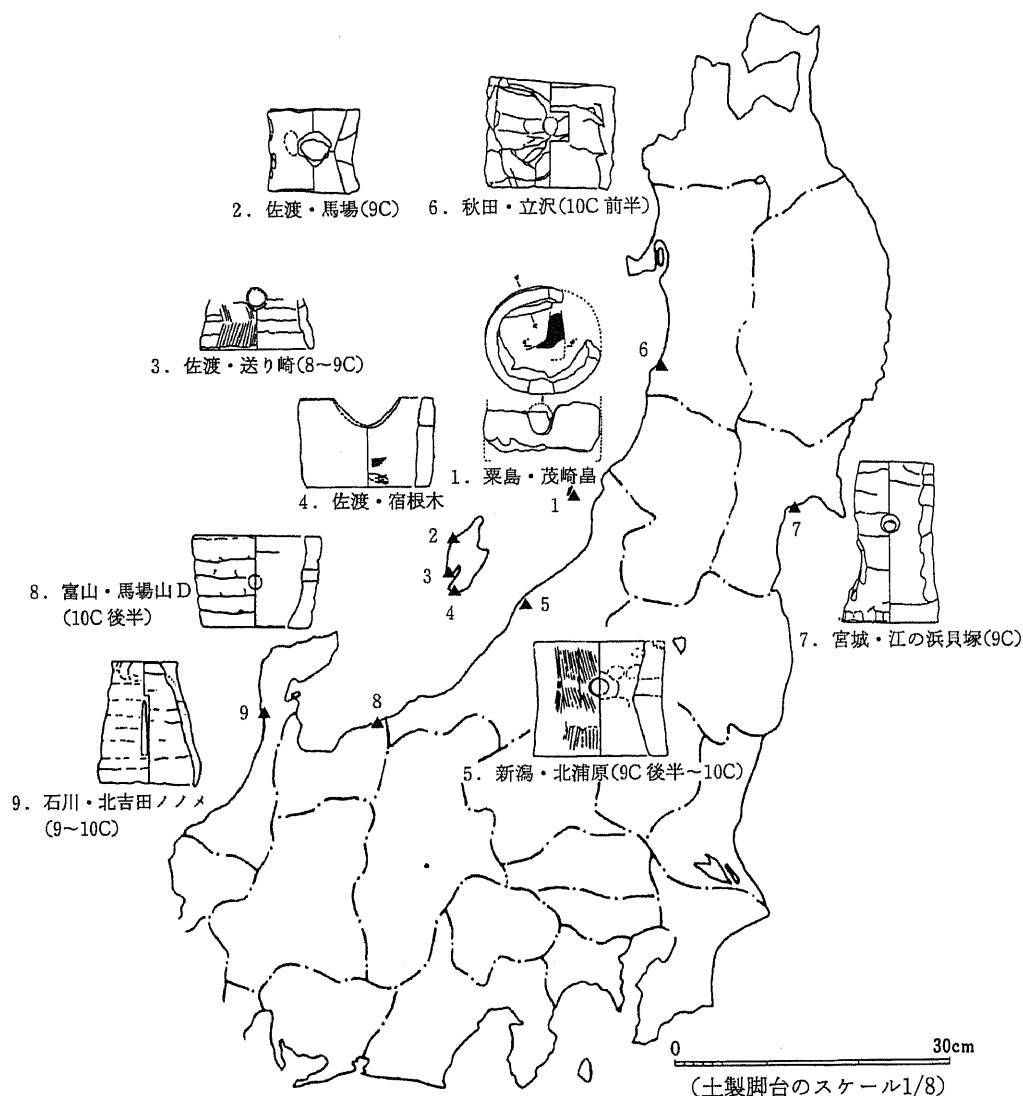
④製塩土器

茂崎島製塩遺跡（本間・計良1972）からは、製塩土器が採集されているが、今回の踏査では採集できず、また文化財館では一部収蔵が確認できたものの、肝心の底部や口縁部の破片を見出すことができなかった。過去に報告されている資料からすると、平底バケツ形のものに、有孔脚台が伴う。有孔脚台の類例は佐渡市の相川小田浜田遺跡や新潟市の北浦原遺跡などに見られる。他に佐渡市相川馬場遺跡例があり、同じく佐渡市羽茂宿根木例は透孔ではなく、半円形の抉りを伴う。粟島の茂崎島製塩遺跡例は一端部が閉じていたかとも考えられ、独自に変容していることをうかがわせる。いずれにせよ、佐渡ないし越後側と交流があった可能性が高い。時期は奈良時代から平安時代にかけての8～9世紀のものと推定される。なお、粟島島内では他に瀬ノ鼻遺跡出土の土師質中実の土製支脚（本間・計良1972）が製塩土器の脚台になる可能性があるが、実見できなかったので断言できない。

製塩土器のうち脚台に注目してみると、粟島茂崎島遺跡例は先述したように通常の単なる円筒状のものと違って一端部が閉じているようである。この類例としては、東北地方の秋田県立沢例（柴田1994）や宮城県江の浜貝塚例（小井川・加藤1994）がある。閉じている側が上か下か問題があるが、使用状態の判明している前者の秋田県立沢例では閉じている側が上にくる。一方後者の宮城県江の浜貝塚例は径の大きい閉じている側を安定度から下と判断しているようである。いずれにせよ、東北地方の両者に粟島茂崎島例は近い。それは地理的な位置から見ても至極当然なことと言える。粟島茂崎島例は、新潟県といっても山形県との県境に近い最北部付近に位置し、類例のある佐渡や越後の遺跡と先の秋田県でも南部にある立沢例とでは直線距離にしてほぼ等距離である。粟島茂崎島例が、現在では同じ県内の佐渡・越後の類例よりも、東北の出羽・陸奥の類例に、より近いという点で、粟島茂崎島例の東北との密接な関係がうかがえる。もっとも、脚台だけでなく、製塩土器本体の方も問題にシなくてはならないが、大型平底煎熬用土器と筒形脚台のセットという観点でみた場合でも、能登（橋本・戸瀨1994）から越中（岸本1994）・越後（高橋1999）・佐渡・出羽・陸奥などが大局的にはつながってくる。平安時代の延暦二十一（802）年、東北の蝦夷経営の国家的な戦略から佐渡の塩120石を毎年出羽国雄勝城に運送することとし、軍事最前線の出羽に塩が送られたことが『日本紀略』に記されている。また、『養老職員令』によれば、8世紀前半には越後から出羽・出羽国への移民記事がみられる。粟島からは、より直接的な製塩の技術移転があった可能性が浮かび上がる。磐舟棚がいつまで機能していたか不明であるが、東北経営の前進基地である岩船津と粟島は水上交通で結ばれ、軍事物資や人員の供給基地としての役割を果たしていたことが推断される。

ところで、この種の有孔土製脚台のルーツは能登にあるようで、既に8世紀段階に遡って有孔土製脚台が能登に見られる。なお、能登の製塩土器と男鹿半島の製塩土器との類似性が既に指摘されている（戸瀨1988）。

その後、中世の製塩の実態は明らかではないものの、佐渡をはじめとして中世に塩が焼かれた場所に「釜屋」という地名が残る（中野1987）とされる。粟島の西海岸にも「釜谷」（旧「釜屋」）の地名や塩釜六所神社の社名が見られる点は注目に値する。鎌倉時代後期か

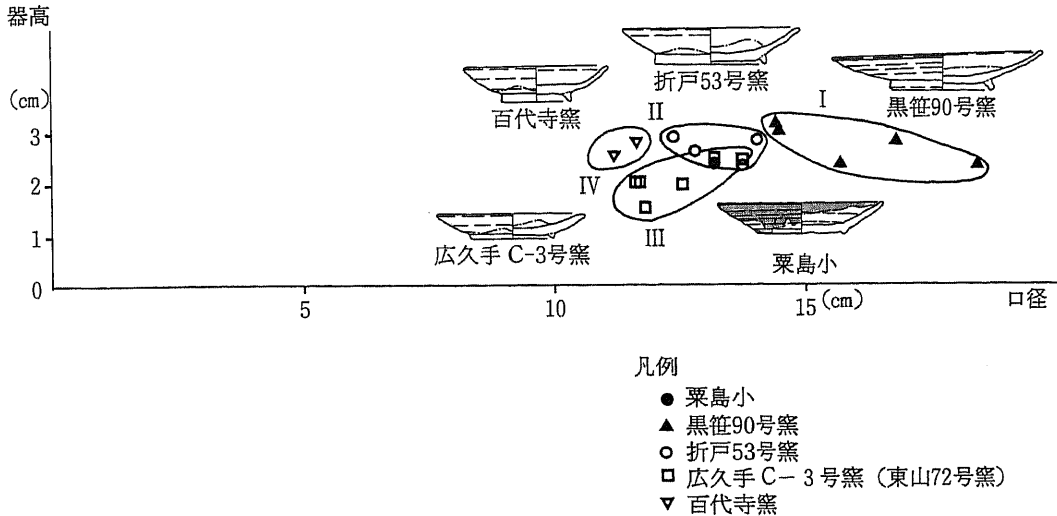


第9図 粟島・茂崎島遺跡例をめぐる土製脚台の類例

ら色部氏の支配下に入った粟島には、島の特産物である鮑、海苔、塩が上納品として課せられたとされるが、まさにそれを物語る地名・社名といってよからう。上納品としての塩は珠洲焼の壺などに入られて色部氏のもとへ納められたのであろう。

⑤灰釉陶器

粟島小学校遺跡出土の施釉陶器は、灰釉陶器と考えられる。形態的特徴や、法量、製作技法などから愛知県猿投窯の折戸53号窯式後半(齋藤1996)に類似する。外面底部の回転糸切り痕が残っている点や、釉薬が猿投第IV期から第V期までの刷毛塗りでなくなり、口辺部を釉薬に浸し掛けした内外面口辺部のみに施されるものになっている点などが決め手



第10図 粟島小学校遺跡出土灰釉陶器法量比較図 (土器スケール1/6)

である。また、高台は断面三角形で低く、口辺部端部がやや薄く仕上げられている点など東山72号窯式に近い。法量の口径13.2cm、底径7.3cm、器高2.4cmは同じく東山72号窯式のものに近似する。ただし、この時期の猿投窯VI期の製品は、その前期にみられた東日本を中心とする広範な供給がみられなくなり、近隣在地の尾張・三河地域の集落への供給が中心になる(齋藤1996)とされ、遠方の栗島までもたらされたとするには気掛かりである。その点、前代の猿投窯に取って代わって隆盛し、東日本に分布を広げる東濃の窯の製品が頸城郡域に卓越するとされ(笹沢1999)、東濃との関連も無視し得ない。その場合、虎溪山1号窯のものと法量的には近い。尾北では猿投窯東山72号窯式に比定される断面三角形の高台をもつ篠岡27号窯式(齋藤1996)のものとの類似性も認められ、他地域からの供給も勘案する必要性もある。時期は10世紀後葉と推定される。

栗島に灰釉陶器がもたらされた背景は明らかでないが、そこで航海や東北経営の安全を祈る祭祀が執行された可能性も考えられる。あるいは、平安時代当時、栗島島内での中心的な施設でもあったのであろうか。この場所は現在も岩船港と栗島を結ぶフェリーの発着点となっている良港、内浦港に接しており、村の主要施設が集中している。交通・政治上の拠点と言っても良からう。

⑥中世陶器

教員住宅遺跡(観音堂遺跡)からは過去に8点の珠洲焼が出土している。器種には、甕・壺T種・壺R種・片口鉢等がある。甕1(20、珠洲では中壺に分類)は肩のよく張ったもので、口縁部の立ち上がりの高く、端部で外反するもので吉岡編年(吉岡1989)I期に相当する。胴部に綾杉文状叩き目が見られる。また、肩部に菊花文刻印が認められる。花卉は8弁である。甕2(21、壺T種)は細身で口縁部は外反する。甕同様、胴部に綾杉文状叩き目が見られる。吉岡編年III期に比定される。肩部に「小」字状のヘラ書き刻文(記号

文「个」がある。壺 R 種は有紋と無紋のものがある。前者 (18) は肩が張っており、肩部に 3 条の櫛描き波状文が施される。波状文にはやや乱れが見られる。頸部直下に「乙」字状の刻文が認められる。口縁部は直線的に外傾し、長い。少々ずんぐりしており、吉岡編年 IV 期に位置づけられる。後者の無紋のものは 2 点あり、そのうち 1 点 (17) は長胴の壺で、口縁部は「く」の字状を呈し、内面頸部に弱い稜をもつ。肩部に「×」と縦 5 本線の刻線文が認められる。口唇部の形状などから III 期に比定される。もう 1 点の壺 R (16) は口縁部がやや立ち気味である。肩部の張りは前二者の中間に位置する。編年的には IV 期に近い。体部の刻線は疵かともみられるが、意図的な刻線文の可能性もある。片口鉢は大・小があり、前者 (23、片口鉢 2) は卸し目があり、後者 (22、片口鉢 1) はそれを欠く。小型の鉢に卸し目を欠く例は III 期まで見られる。前者は体部が直線的になり、内面に卸し目が 15 条ほど疎らに浅く施される。卸し目の 1 単位の幅は約 2 cm で IV 期のものよりもやや狭い。口唇部が斜めから水平に移行しつつあり、吉岡編年 III～IV 期の過渡期のものと推定される。後者は体部外面にヘラ描きの文様があるが、何を表現しているかは不明である。口唇部の形状は IV 期のものに近い。

以上から、一部甕が I 期に位置づけられるのを除くと殆んどが III～IV 期に相当し、これらがもしもセットであれば、IV 期を中心とした埋葬と推定される。あるいはセットでなければ I 期から IV 期に至る埋葬の時間幅を考えることもできる。年代的には 14 世紀の鎌倉末～南北朝期を中心とする時期とみられる。

一方、役場・診療所遺跡から出土している遺物の中に、珠洲焼の甕 A 類が存在する。口縁部の肥厚する特徴から吉岡編年 V 期に位置づけられる。また、刻印部の破片が認められるが、その四線格子文は笹神、権兵衛沢 1 号窯の三線格子文 (小田 1999) に近い。しかし、厳密には異なる。時期は室町前期の 15 世紀の前半頃と考えられ、観音堂遺跡と同様に付近の石造種子仏群との関係が濃厚で、以前、この辺りに寺院があったという伝承と符合する。

その他出土地不明の片口鉢 (7) が 1 点存在する。大型のもので、内面の卸し目を欠く。口辺部がやや丸みをもって内彎気味なので、I 期に遡る可能性もある。口縁部断面形もその時期のものとして矛盾はない。年代的には 12 世紀後半ということになる。

粟島は中世、南北朝期の板碑と石像物が知られているが、地頭色部氏の所領であった。内浦地区には今回資料紹介した役場・診療所遺跡と観音寺周辺の教員住宅 (観音堂) 遺跡の 2 遺跡が存在する。両者を中心に発掘五輪塔を加えると裕に 100 を超える 134 基の石仏・石塔群がある。これらの評価に当たっては、①領主の色部氏の墓所説 (小野田 1972)、②広く地方武士や在家あるいはそれ以下の階層までも含む人々を造立者とする説 (中野 1988) などがある。どちらも魅力的な説であるが、後者は、対岸の本州島の色部領の各階層を意識しているらしい。そちらから見ると、粟島は西方に位置し、西方浄土の地に相応しく、「聖域」「霊場」観念が形成された (品田 1999) ということになる。しかし、一方で地元粟島では領主に海産物を貢納する漁民の暮らしがあったわけである。さらに、粟島には中世城館の粟島山城と釜谷城の二つの山城があった (新潟県教育委員会 1987)。これらが常時機能していたわけではないが、それらを背後に日常は館などの支配拠点で在地支配がおこな

われていた可能性もある。有事の時のみの駐留であったかもしれないが、今後、粟島の城館遺跡の研究を積極的に推し進める必要がある。粟島在地の人々にも目を向けるべきであろう。

おわりに

残念ながら、新に採集された資料は殆んど無く、既報告資料も縄文土器をはじめとして収蔵場所とされる村の施設に存在を確認することができなかった。これは誠に遺憾なことである。その一方で、今まで報告されていなかった石皿を出土地不明としながらも資料化し、報告することができたことはせめてもの救いであった。

本調査ならびに報告に当たっては、地元粟島浦村教育委員会、粟島浦村立小中学校、新潟県教育庁文化行政課、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団、村上市教育委員会、村上市郷土資料館の各機関と、井藤博明、寺崎裕助、田海義正、羽生令吉、古川知明、前山精明、三ツ井智子、矢田俊文、柳平則子、山本 仁の各氏にお世話になった。末筆ながら厚く御礼申し上げたい。

なお、今回の調査体制は以下のとおりである。

調査主体：新潟大学考古学研究室

調査責任者：橋本博文

調査参加者：

橋本博文(新潟大学人文学部教授)、呉 賢櫨(新潟大学大学院現代社会文化研究科)、小池勝典、高橋明公子(新潟大学大学院人文科学研究科学生)、大野安希、奥山優一、瀬川絵里、武部美恵子、田辺菜緒美、田丸司、森合桂子、矢木秀典(新潟大学人文学部考古学専攻生)、青野洋子、甲 雅直、小林なつみ、小林寛美、坂爪彩子、古川智子(新潟大学人文学部考古学実習受講生)

〈註〉

- 1 巻町教育委員会前山精明氏ご教示。なお、豊原例は顕著な被熱痕を有する「鏢をもつ大型石棒」の頭部破片で、伴出土器から中期中葉前半段階までの可能性が示唆されている。
- 2 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団寺崎裕助氏ご教示。

(橋本博文)

【参考文献】

- 阿部朝衛 1987 「考察編Ⅰ 第6章 磨製石斧生産の様相」『史跡 寺地遺跡』：353-372 青海町
- 小井川和夫・加藤道男 1994 「宮城県・岩手県」『日本土器製塩研究』：72-102 青木書店
- 小田由美子 1999 「五頭山麓古窯跡群」『新潟県の考古学』：380-385 新潟県考古学会

- 小野田十九 1972 「II 粟島の石造遺物」『粟島』：47-64 新潟県教育委員会
- 岸本雅敏 1994 「富山県」『日本土器製塩研究』：679-693 青木書店
- 小林達雄 1986 「第2章 縄文時代の社会と文化／二 呪術の世界とその道具」『新潟県史』通史編I 原始・古代：182-185 新潟県
- 小林達雄 2002 「石棒」『日本考古学事典』：487-488 三省堂
- 近藤義郎編 1994 『日本土器製塩研究』青木書店
- 齋藤孝正 1996 「折戸53号窯式」『日本土器事典』：862-863 雄山閣
- 齋藤孝正 1996 「美濃の灰釉陶器」『日本土器事典』：864-865 雄山閣
- 笹沢正史 1999 「第4章 古代 第4節 生産と流通／第2項 窯業」『新潟県の考古学』：331-337 新潟県考古学会
- 塩原知人・竹内 裕 2001 「第II章 遺跡周辺の環境」『高平遺跡』：5-9 村上市教育委員会
- 品田高志 1999 「中世越後の民衆と他界観」『中世の越後と佐渡』：167-182 高志書院
- 柴田陽一郎 1994 「秋田県」『日本土器製塩研究』：122-134 青木書店
- 菅沼 亘・阿部恭平・石原正敏・中澤幸男 1998 『笹山遺跡発掘調査報告書』新潟県十日町市教育委員会
- 関 雅之 1986 「第3章 弥生時代の社会と文化／三 生活と社会」『新潟県史』通史編I 原始・古代：235-237 新潟県
- 関 雅之 1990 「古代細型管状土錘考」『北越考古学』 第3号：21-37 北越考古学研究会
- 高橋 保 1999 「第4章 古代 第4節 生産と流通／第4項 製塩」『新潟県の考古学』：345-348 新潟県考古学会
- 高橋保雄 1992 「彫刻石皿」『関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』：307-311 新潟県教育委員会
- 戸瀧幹夫 1988 「志賀町北吉田ノノメ遺跡出土の製塩用器台形土器」『石川考古』第186号：3 石川考古学研究会
- 中野純・諫山えりか 1999 「7 精神文化／第2項 石棒」『新潟県の考古学』：198-201 新潟県考古学会
- 中野豈任 1987 「第3章 中世の生活と信仰／第1節 館と村と百姓」『新潟県史』通史編2・中世：347-348 新潟県
- 中野豈任 1988 『忘れられた霊場—中世心性史の試み—』平凡社
- 新潟県 1986 『新潟県史』資料編I 原始・古代 図版710 石棒
- 新潟県 1986 『新潟県史』資料編I 原始・古代 図版733 弥生時代石器（石錘）
- 新潟県教育委員会 1987 『新潟県中世城館分布調査報告書』：66
- 橋本澄夫・戸瀧幹夫 1994 「石川県」『日本土器製塩研究』：639-678 青木書店
- 早川正一 1983 「磨製石斧」『縄文文化の研究』7・道具と技術：60-74 雄山閣
- 堀口修・谷藤保彦 1997 『赤城村資料図録I 国指定史跡 瀧澤石器時代遺跡』群馬県

勢多郡赤城村教育委員会

本間嘉晴・計良勝範 1972 「I 栗島の考古」『栗島－1972－』：3-46 新潟県文化財調査年報 第11 新潟県教育委員会

前山精明 1994 「豊原遺跡」『巻町史』資料編1・考古：164-206 巻町

長谷川伸 1999 「7章 中世に生きる民衆／1節 村人のくらし」『村上市史』通史編1：252-257 村上市

山本暉久 1983 「石棒」『縄文文化の研究』第9巻・縄文人の精神文化：170-180

吉岡康暢監修 1989 『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館

吉岡康暢 1990 「珠洲焼から越前焼へー北東日本海域の陶磁器交流ー」『日本海と北国文化』：289-317 小学館

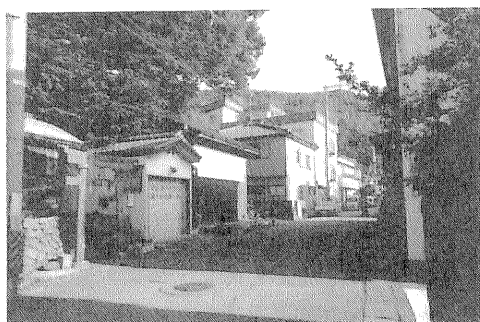
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館



①粟島内浦港



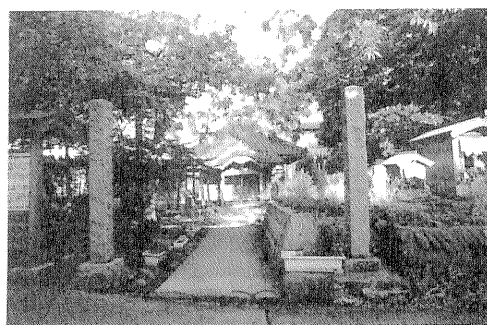
②粟島小学校遺跡



③元公民館遺跡



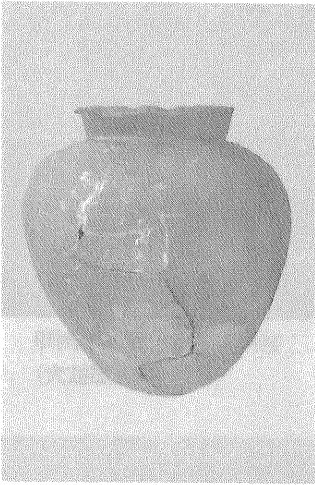
④役場・診療所遺跡周辺石造物群



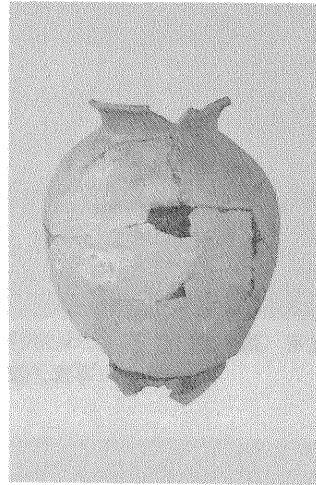
⑤教員住宅（観音堂）遺跡



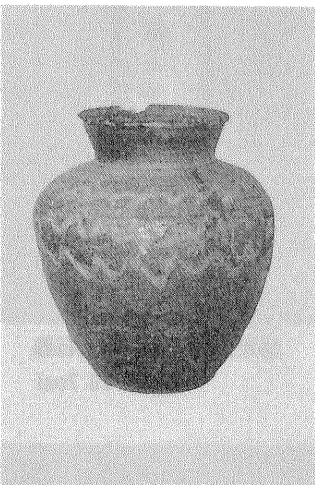
⑥観音寺と文和三年銘板碑



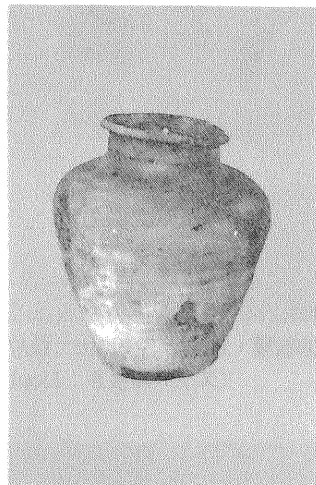
⑦教員住宅（観音堂）遺跡出土珠洲焼甕
（高さ：42.3cm）



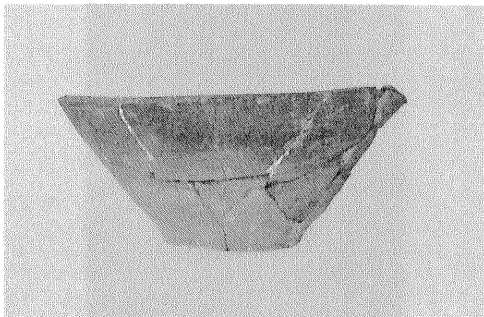
⑧同遺跡出土珠洲焼甕
（高さ：34.6cm）



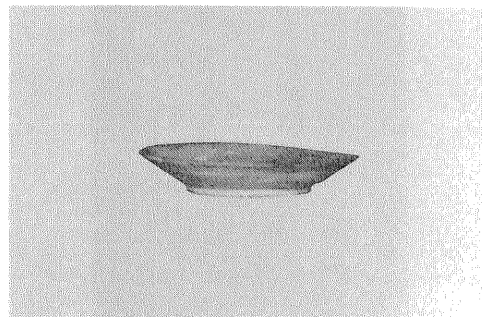
⑨同遺跡出土珠洲焼壺
（高さ：19.7cm）



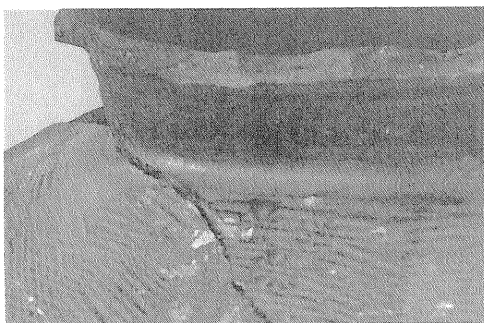
⑩同遺跡出土珠洲焼壺
（高さ：21.2cm）



⑪同遺跡出土珠洲焼片口鉢
（高さ：13.6cm）



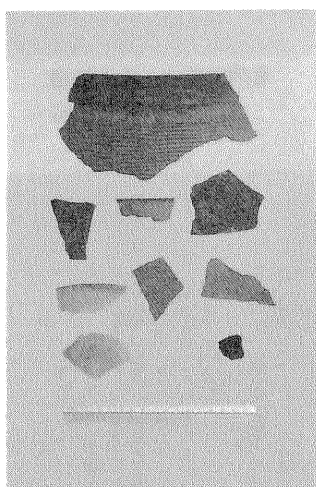
⑫粟島小学校遺跡出土灰釉陶器
（高さ：2.4cm）



⑬教員住宅（観音堂）遺跡出土珠洲焼甕印花文
(写真⑦細部拡大)



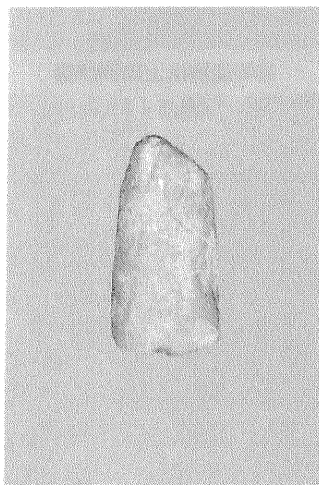
⑭同遺跡出土珠洲焼刻印
(写真⑧細部拡大)



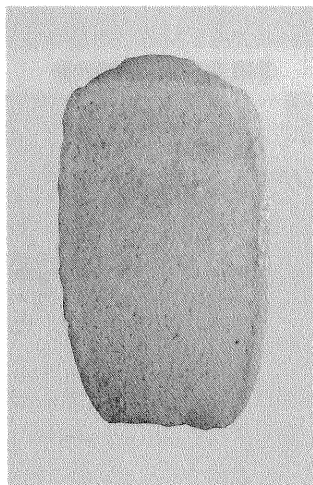
⑮役場・診療所遺跡出土土器片
(スケール長さ：15cm)



⑯元公民館遺跡出土石器
(長さ：20.7cm)



⑰牧平遺跡出土磨製石斧
(長さ：9.4cm)



⑱出土地不明石皿
(長さ：37.5cm)